水仙

〔武江産物志 藥草〕道灌山ノ産　鐵色箭（きつねのかみそり）

〔下學集 下草木〕水仙（スイセン）華（クワ）香體素欲傾城山礬是弟梅是兄、日本俗名曰雪中華也、

〔尺素往來〕爲庭上之景莊嚴前栽仕候、春花者（中略）水仙花、

〔多識編 二山草〕水仙、今案爾波岐、異名金盞銀臺、

〔和爾雅 七草木〕水仙（スイセン）單瓣者名金盞銀臺、千葉者名玉龍玲、

〔古今要覽稿 草木〕水仙

水仙は花信風小寒三候にあて、梅つばきと共に、嚴冬に花開き、その香も梅にをとらず、盛りも久しきものにて、めづべきものなれども、皇國にて歌にも詠ぜられず、本草和名、和名類聚抄等にも載られざるは、この花の不幸なり、抑この花元より此國に自生多くして、人家園砌にも植置て、冬月のながめとし、盆にうへ插花となし、金殿玉樓の上段に咲匂ふこと、餘花の及ばざるもの也、これにも單瓣重瓣あれども、單瓣のもの最勝れり、古へより圖に畫き、物に彫したるもの、皆單瓣のものにて、祐乘の彫せし水仙は、時珍の五瓣といへるも同日の誤なり、金盞銀臺もひとへのもの也、大和本草にも、千葉を下品とすといへり、すべて花はひとへなるよしは、徒然草にもいへども、殊に水仙は單をよしといふべし、又伊豆島日記に云、三宅島新島には、水仙寒菊は道もせ垣根などに、をのづからありては草のごとし、霜の降ること稀なれば、葉も花もいきほひよしといへり、さて、安房國も暖氣にて自生殊の外にこえたり、さて花信風小寒三候に配したれども、其苗は九月頃より生じ、葉は二枝づゝ相對して、一株四枚のものなれども、五枚出るもあり、花は四葉の中より出て、初は帽をかぶりたる如し、其莖大きくなり、帽やぶれて花の開くもの也、其數多きは七八輪に至るもあり、少きものにても三輪より少なきはなし、早きは九月末より開くあり、をくるるは二月末三月に及もあり、信濃國人冬咲たる水仙の花を見て驚きて、我國にてはる咲に、江戸